平成２２年庄原豪雨災害

平成22(2010)年7月

■気象の概要

７月１１日に西日本から日本海まで北上した梅雨前線は１２にはゆっくり南下し、西日本に停滞しました。１３日には再び日本海まで北上し、16 日にかけて停滞しました。この前線に向かって南から暖かく湿った空気が流れ込んだため、庄原市では１６日午後５時４３分までの 1 時間に６４ｍｍの非常に激しい雨を記録、１日最大雨量の極値を更新しました。猛烈な雨のエリアでは雹も降りました。

土砂災害による被害が集中した地域では、強い降雨を観測し始めた 15 時 30 分からわずか 1 時間後の 16 時 30 分頃には、土砂災害が多発し始めました。一方で、大戸観測所から約 7 km離れた本村観測所で観測された最大 60 分間雨量は、17 時 40 分から 18 時 40 分までで、わずか 6ｍｍでした。

今回の大雨の特徴は、15 日までの前期雨量が 250ｍｍ程度と非常に多いこと、そして非常に強い雨域がわずか 5 km弱四方の狭い地域に集中していたことにあります。

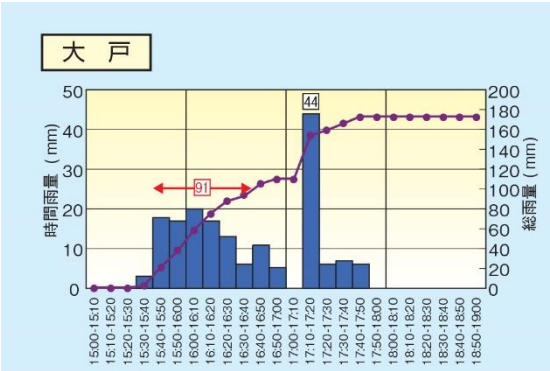
時間雨量上位地点（7月16日 15時～7月16日19時）　：庄原市

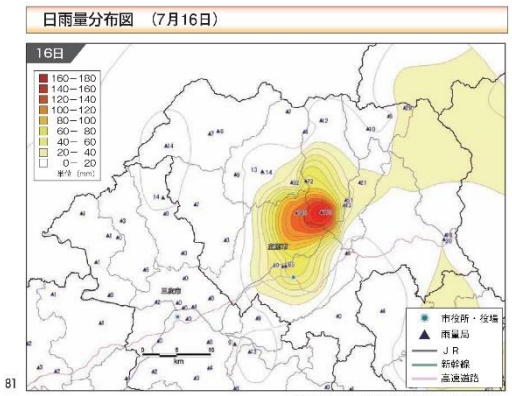
市 町	観測局	60分間雨量			10分間雨量		
		日時	観測局		雨量	日時	
庄原市	大戸	91	16 日	15:40 ～ 16:40	44	16 日	17:10 ～ 17:20
	庄原（気象庁）	64	16 日	16:40 ～ 17:40	20	16 日	17:10 ～ 17:20
	川北	60	16 日	16:20 ～ 17:20	19	16 日	15:10 ～ 15:20
	西城中野	34	16 日	15:20 ～ 16:20	12	16 日	15:40 ～ 15:50
	大屋	30	16 日	17:10 ～ 18:10	13	16 日	17:10 ～ 17:20
	比和	12	16 日	17:40 ～ 18:40	6	16 日	17:50 ～ 18:00
	本村	6	16 日	17:40 ～ 18:40	2	16 日	17:40 ～ 17:50
	永田	3	16 日	17:30 ～ 18:30	2	16 日	17:30 ～ 17:40

※赤字：時間雨量の最大観測値を示す。単位（mm）

観測局	日雨量						
	10日	11日	12日	13日	14日	15日	16日
大戸	0	50	34	103	55	20	174
川北	0	53	29	93	65	19	125
大屋	0	82	43	95	47	25	74
庄原	0	32	51	98	67	23	65
庄原建設支局	0	32	51	101	65	23	50

※赤字：日雨量の最大観測値を示す。単位（mm）





降雨資料出典：広島県防災Web、気象庁HP

■当初の被害状況

当時の庄原市長滝口季彦の回想（「砂防と治水」２０４号＝２０１１年）によると、午後５時半ごろ、市役所から８kmほど北東に離れた川西町の住民から「付近の河川が氾濫し，床上まで浸水している。車も流されている」との通報がありました。「この一本の電話が市民からの被害の第一報で、未曾有の災害への対応の始まりでした」と述べています。

同市は午後５時 50 分に庁内に災害対策本部を設置。入ってくる情報は家屋の浸水だけでなく「車が何台も流されている」「工事中の橋脚の上で作業員が孤立している」「土石流で家屋が流されている」など初めて経験する出来事ばかりでした。

この間の雨量は同市観測史上いずれも最大値を記録。しかも降雨は市役所から北東方向に位置する庄原市のほぼ中央部、４㎞四方に限られ「山沿いの空を見ると低く垂れ込めた真っ黒い雲から真下に向かって落ちる水柱が見えた」というほどの局所的な豪雨です。前触れもなく平穏な人々の営みを急襲した「ゲリラ豪雨」だったことになります。「庄原豪雨災害　篠堂川　復旧記念碑」には川北町と西城町の一部で局地的な集中豪雨が発生し、６０分雨量が９１ｍｍ、１０分雨量が４４ｍｍだったと刻まれています。

上空から見た庄原市川北町篠堂の被災地

■住民の避難と被災者の救出

同じ滝口の回想によると、18 時台に被害の拡大が予想される市内２地域の１２１世帯３１２人に二度にわたって避難勧告が出されました。市内５箇所に避難所を開設。食料や毛布を届け、保健師らを配置。７月 24 日の閉鎖までに最大１６８１人が避難しました。同時に広島県警へ協力を要請し、広島県知事を通じて陸上自衛隊に災害支援派遣要請。過去幾度となく豪雨災害を経験している同市も県警や自衛隊に協力を求めるのは初めてのことでした。

また国土交通省中国地方整備局から災害対策現地情報連絡員（リエゾン）が到着。緊急災害対策派遣隊（ＴＥＣ-ＦＯＲＣＥ）と併せて、被災状況の把握と技術的指導を受けました。陸自、県警機動隊、広島県内広域消防相互応援協定に基づく応援隊が相次ぎ到着し、孤立者の救出活動が本格的に開始されました。

平成２６年に建立された復旧記念碑（撮影・金山一宏）

一時は３３５人が孤立状態となっていましたが、多くは朝までに避難することができました。夜明けとともに始まったヘリコプターなどによる救出活動で救助を待っていた孤立者 43 人も無事でした。安否の確認ができない高齢の女性１人については捜索活動を続けましたが、２３日で終結。その６日後の 29 日、自宅のあった場所から約７㎞下流の河岸で遺体となって発見されたのは残念なことでした。

■被害の全容

土石流災害３７か所、崖崩れ災害６か所が発生しました。死者は１人、重傷者１人を出し、家屋全壊 14 戸，半壊 14 戸、一部損壊１０戸、床上浸水１戸、床下浸水 36 戸の被害が出ました。また被害額は林業被害の１２億７８００万円を筆頭に２９億９７００万円に上りました。

トピック

写真がとらえた「水柱」　土石流が発生した方面に猛烈な雨が降るようすを庄原市の写真家金山一宏が南西９㎞の庄原格致高校から撮影していた。金山は７月１６日午後４時２５分ごろ、卒業アルバム撮影のため中庭で待機中、北東の空に黒い雲が垂れ、大量の雨が降る光景を目撃。２０分で約１６０枚を撮った。その間、高校付近に雨は降らなかった。目撃し撮影した風景は素早く動く雲が渦巻きながら滞留しており、異様だったが、これほどの甚大な被害をもたらしていたとは想像もしなかったという。金山の写真は局地的な豪雨のメカニズムを知る手掛かりとなる、貴重な映像資料である。

篠堂谷を襲ったな降雨で発生した雨の柱
（庄原格致高校より７月 16 日 16 時 35 分撮影）
撮影：©2010 金山一宏